八戸工業大学紀要　第 39 巻（2020）pp.73-81

魚食文化普及に向けた教育プログラムの研究
――八戸イカの日フェスティバルを事例として――

髙屋 喜久子[†]・後藤 厚子[††]

The Development of an Educational Program for Fish Eating Culture
– A Case Study of the Hachinohe Squid Day Festival –

Kikuko TAKAYA[†] and Atsuko GOTO[††]

ABSTRACT

Squid catch at Hachinohe Port is ranked at the top in Japan, but as a smaller amount of fish has been eaten nation-wide, the promotion of fishing eating culture is considered to be a challenge even in Hachinohe. A new fishery industry supporting facility, named Hamaichiba Minatotto, opened in April 2019, and the first Hachinohe Squid Day Festival was held in August. A number of students from the Creative Design Department, Hachinohe Institute of Technology, were involved in creating bustling space in the facility and planning pleasant events for visiting families. Twenty-two students of the department supported seven programs as the stuff members of the two-day grand opening. This study summarizes the students' involvement in the newly opened facility and discusses the possibility and future development of this community-contributing educational program.

Key Words : *Hachinohe, fish eating culture, Minatotto, educational program, community-contributing*

キーワード : 八戸，魚食文化，みなとっと，教育プログラム，地域貢献

1. はじめに

八戸はイカの漁獲高連続日本一を誇り、魚食文化が盛んな地域である。しかし近年は、特に若年層を中心に急速な「魚離れ」が進行しており、魚食文化の普及が大きな課題とされている。農林水産省によると、1 年間 1 人当たりの魚介類消費量は、2001 年の 40Kg をピークに 5 年後の 2006 年には 32Kg となり、減少傾向が続いている。

令和 1 年 12 月 6 日受付

† 感性デザイン学部創生デザイン学科・教授

†† 感性デザイン学部創生デザイン学科・准教授

「家計調査年報」によれば、1 年間 1 人当たりの生鮮魚介類の購入量を比較すると、1965 年から 40 年後の 2006 年には約 3 割に減少している。魚の種類別では、サケ、マグロ、カツオ、サンマが 1.4 倍と増加しているのに対して、サバ、アジ、イカは半分以下に減少している。その背景には、「低価格志向」や「簡便化志向」が考えられる。消費者がより低価格で調理方法の簡便な切り身魚を選択し、一匹の魚丸ごと購入を敬遠する傾向の現れであろう。また、家族構成員が減少していることも、大きく影響している。

令和元年 4 月八戸市館鼻岸壁近くに海業支援施設が開業し、5 月には八戸市民のさかなとして

「イカ」が認定された。8 月 10 日イカの日に「第 1 回八戸イカの日フェスティバル in みなとっと」の開催が決定され、本学創生デザイン学科の学生がイベント企画などを提案することになった。さまざまなアイディアの中から 7 種類のプログラムが採用され、本番に向けてブラッシュアップを重ねて、実現の運びとなった。本稿では、学生による発案からイベントが開催されたイカの日までの経過報告をまとめると共に、地域貢献型の魚食文化普及を目指した教育プログラムとして、応用展開を探求する。

2.「浜市場みなとっと」誕生

水産業への理解と未来の担い手を育成すると共に地域交流による活性化を図る目的で、八戸市湊町に海業支援施設が建設された。その名称公募が 2018 年の 8 月から始まり、9 月の締め切りに向けて、高屋研究室でゼミ学生らと共にブレーンストーミングによるアイディア展開を行った。その際、海業支援施設のイメージとして次のような意見が出された。

① 高齢者に加えて、若い人や子供も行く施設。
② 楽しめる施設。
③ 館鼻岸壁朝市と連動し観光客が来場する施設。
④ 大人にも子供にも、覚えやすい施設名称。

以上から、魚食文化普及を目的として親子三世代で楽しんでもらえる施設にしようと、名称の方向性を決定した。

「おらほの家」「海の街ぽわそん」「シーサイドマルシェ」「鮮極市場」など 6 案を高屋研究室から応募した結果、「浜市場みなとっと」が採用された。「みなとっと」は「みんな」で、「とっと（魚）」を楽しむと言う意味合いである。八戸みなと漁業協同組合が運営すること、湊町に建設され、港近くにあることも掛けて、「みなと」＋「とっと」＝「みなとっと」とした。愛称「みなとっと」だけでは何の施設か分かり難いため、施設の概要を示す浜市場を冠に記して「浜市場みなとっと」を考案され、応募した。「みんな」には親子三世代、つまり老若男女全ての人が楽しめる、地域住民や国内外からの観光客に来てもらいたい、地域と行政や大学の協働といった意味が込められている。

応募総数 64 案から選出された際に、「新鮮さがアピールできて、おぼえやすく、親しみがある」といった点が評価され、満場一致で決定したとの後日談を伺った。採用後は、みなと漁協や海業支援施設の方々から、「みなとっと」と呼ばれ親しまれている。（以下、正式名称「浜市場みなとっと」を略して「みなとっと」と記載する。）最近では、さらに略して「とっと」の愛称でも呼ばれるていると聞いた。

2019年4月21日9時から、みなとっとのオープニングセレモニーが開催された。八戸市小林市長が祝辞の中で「みなとっとは、すぐに覚えられる良き名称であり、一度聞いたら忘れられない。」と述べられた言葉が、印象に残っている。研究室代表として斗沢君と岩澤君、高屋の三名がテープカットに加わり、海業支援施設のオープンを祝った。イカ手袋の研究をしていた高屋研究室の尾崎君と、後藤も参列して、イカどんや多くの方々との交流が生まれ、後のプロジェクト展開に繋がることになった。

写真 1 オープニングセレモニー写真
左の写真：左から岩澤君、斗沢君、高屋
右の写真：右から尾崎君、みなと漁協 河村専務理事、高屋、みなと漁協 岡沼組合長、岩澤君、斗沢君

3. イカの日フェスティバルに向けて

「みなとっと」の命名がきっかけとなり、八戸みなと漁業協同組合（以下、みなと漁協）と八戸工業大学の連携書が締結された。「みなとっと」の売り上げ増加を目的とした企画・アイディア提案、およびブランディング構築に資すると共に、地元水産業への貢献を図るものである。高屋・後藤担当のビジュアルデザイン演習Ⅲ（創生デザイン学科３年生前期選択）の授業を中心として 5 月 20 日より、教育プログラムを開始した。概略の進行と経過については、**表 1** に記載する。

表 1 プログラムの概略進行表

期日　令和元年	主な内容	開催場所
１：５月 20 日	事前調査ウェブなど、グループ編成５チーム	本学 KD プラザ
２：５月 29 日	みなとっと現地調査、大越室長１回目見学説明	浜市場みなとっと
３：６月 10 日	現地調査の振り返り	本学 KD プラザ
４：６月 17 日	グループでのアイディア出し	本学 KD プラザ
５：６月 24 日	アイディア発表と意見交換会、大越室長２回目	本学 KD プラザ
６：６月 26 日	第１回イカの日フェスティバル開催打合わせ	八戸水産会館
７：７月１日	イベント企画制作	本学 KD プラザ
８：７月８日	イベント内容の相談会、大越室長３回目	本学 KD プラザ
９：７月 22 日	イベント企画の発表準備と予算ぐみ	本学 KD プラザ
10：７月 29 日	メディアセンターでの発表会、大越室長４回目	本学メディアセンター
11：８月８日	イカ手袋ライトアップ点灯式	本学 KD プラザ
12：８月９日	みなとっと搬入	浜市場みなとっと
13：８月 10 日 11 日	第１回八戸イカの日フェスティバル開催	浜市場みなとっと
14：10 月 15 日	振り返りの意見交換会	浜市場みなとっと

3.1 事前調査　5 月 20 日

みなとっとの現地調査に向けた準備作業として、5 月 20 日に事前調査とグループ編成を行った。22 名の学生が 5 チームのグループを作り、全国の産直施設のウェブサイトを調査したり、みなとっとについて話し合ったりしながら、興味を持ったテーマや質問事項などをまとめた。商品の品揃えやお客様の年齢層、八食センターとの差別化、強みは何か、深浦漁協など他の漁協との連携などの質問事項が選出された。商品・来店客・その他の 3 種類に分類し、**表 2** に記載する。

表 2 事前調査による質問項目

分類	商品に関して	来店客について	その他、施設に関する項目など
質問項目	・商品の品揃え ・イカ墨ソフトクリーム ・八戸産の魚は何割を占めるのか ・販売品の産地 ・冷凍品が多い ・イカの加工品の種類 ・新鮮度 ・料理の品揃え	・お客様の年齢層 ・２世代３世代の割合	・テーマカラー、イメージカラー ・内装へのこだわり ・イベントを開催しているのか ・深浦漁協など他の漁協との連携 ・何を見てもらいたいのか 知ってもらいたいのか ・八食センターとの差別化 ・強みは何か

3.2 現地調査　5 月 29 日

17 名の学生と 2 名の教員が 9 時にみなとっとに集合し、みなと漁協の企画室長大越政弘氏（以下、大越室長）からの説明および案内を受けた。産直コーナーの開店は 10 時であるが、ご配慮により開店前の店内の様子なども併せて見学することが出来た。初めて訪問した学生も多く、産直販売コーナー、漁師食堂「鮮八」、干物を作る部屋、研修室などを見学した後、グループごとに施設内の調査や、施設の方々へのインタビューを行った。研修室では、赤イカの触手を使った揚げ物を試食する機会を得た。遠く大西洋の真中までアカイカ漁に出かけ、捕獲後は即刻に急速冷凍をする話などを興味深く伺った。学生達はイカ墨ソフトクリームを食べて満足そうに、みなとっとの調査を終え、その後は、近隣の館鼻岸壁朝市会場、陸奥湊周辺を調査した。

3.3 現地調査の振り返り　6 月 10 日

6 月 10 日に調査の振り返りを行った。まずはグループ内で意見や調査結果を出し合った後、ブレーンストーミングを行った。各チームが、みなとっとの現状と課題について発表し質疑応答を行うと同時にクラス全体で情報共有を図った。KJ 法によりまとめられた各チームの意見は、次のとおりである。

子供が楽しめるよう、ガチャガチャやキーホルダー、おもちゃなどを置く。気軽に食べられるホットドッグの自動販売機が欲しい。閑散としている、綺麗すぎる、殺風景で地味。朝市や八食センターのような温かみがない　。イカスミソフトを可愛くインスタ映えするように。通路が広く歩きやすい反面、物足りない。中央の商品展示が無機質。本日の目玉商品の表記を遠くか

ら見てもわかるように。内装の飾りが少なく、どこか寂しい。商品棚の側面や、壁天井の空間を飾りつける。商品の種類が少ない。ターゲットは県内か県外か。八食センターとの差別化、何を売りにするか。若い人を呼び寄せるアイテムが少ない。漁師さんとの距離が遠い。市民の認知度が低い。観光客はお土産、主婦など地元客は新鮮なものを求めている、どちらを重視するのか 。新鮮な魚があった。農協とも連携してしていた。イメージきれいな印象。看板が見づらい。場所が分かりにくい。外観、少し暗めな色で入りづらい。客層は年配の方が多い。イカスミソフトの値段が少し高く、特別感が足りない。

以上の意見をもとに、みなとっとの問題点を次の３点にまとめた。

① 魅力が少ないみなとっと。
② 殺風景で地味。
③ 若い人が少なく賑わい感がない。

3.4 グループ内でのアイディア出し　6 月 24 日

調査の振り返りによって得られた上記 3 点の問題を中心として、その解決策をグループ内で話し合った。その際、現状での課題や問題点をキーワードとしてアイディアを考案し具体的な取り組みを書き出しながら、その重要度、実現の可能性や連携先についても討議した。各グループの案は毎回、作業時間終盤の時間帯で相互に発表することで情報共有を図った。

次のような内容が具体的に挙げられた。

・商品の魅力が少ない現状から、多種多様な商品を置くために、他の店で売られている人気商品をリサーチする。

・殺風景なという問題点から、水槽を設置、看板や案内板の工夫、簡易釣り堀やお絵かきスペース、館鼻岸壁朝市の続きで来てもらえるよう屋台を設置する。

・情報不足の課題解決のために、CM 広告、地図を分かり易くする。インスタ映えする情報発信や SNS の有効活用。

3.5 アイディア発表と意見交換会　6 月 24 日

6 月 24 日には、みなと漁協の大越室長に来学を賜り、現地調査の報告とそれに基づく問題解決のアイディアについて学生が発表し、意見交換を行った。学生のアイディアに対して、大越室長から即座に生の意見がその場で聞けることは大いに役立ち、モチベーションアップにつながった。質問事項を教員がまとめて、メールでやりとりする手法も想定されたが、今回直接顔を合わせた相談会で、現場の担当者にご説明いただくことのフレキシビリティと、そのスピード感、情報と会話のキャッチボールは非常に有意義であると体感した。

体験をプロデュースする、子供が楽しいみなとっと、子供達に体験させる、写真を撮りたくなる、女子高校生（JK）向けなどの案が出た。具体的なプログラム案を考慮しながら、チーム編成を 3 グループ（5 名で 1 グループ）から 5 グループ（2～3名で 1 グループ）へと再編成した。そのことは一人ひとりの作業濃度を上げる結果となり、成功へと結びついた。

その二日後には、「第 1 回イカの日フェスティバル」（以降、略して「イカフェス」と記載する。）が 8 月 10 日・11 日に開催される旨の会議が八戸水産会館にて開催された。卒業研究のテーマとしてイカ手袋のライトアップを企画していた、4 年生の尾崎真央君（以下、尾崎君）が同席した。会議の場では、イカフェス開催のポスターを制作することが決まり、その案を三日後に提出するという任務が尾崎君に任された。

3.6 イベント企画　7 月 1 日

7 月 1 日には、イカフェスに向けての具体的なイベント企画を、練ることになった。子供や若い人たちにも来てもらえる、楽しんでもらえるイカフェスにしようと、方向性が固まった。

3.7 イベント内容の相談会　7 月 8 日

学生たちがグループごとに考えたイカフェスのイベント内容について、大越室長との相談会を設けた。実現出来るか出来ないかの可能性に

ついての、ご判断を賜り、企画内容のブラッシュアップを進めた。各グループの実施内容について、次のような骨子が固まってきた。

クリアファイルにアカイカ・スルメイカ・ヤリイカなどの写真と解説をのせたグッズ制作。写真合成のワークショップ。大漁旗のデザイン案や、ミニのぼり旗の制作。子供が楽しいみなとっとを目指した塗り絵やポストカードの制作イベント。インスタ映えフードとして、海鮮カップケーキを作る。本物を作って販売するのか、モデルを作って人気投票をするのか。子供向けの八戸ジュニアお魚検定などが、提案された。

3.8 イベント企画発表と予算組み　7 月 22 日

イベント企画発表の準備と予算組みを行なった。実現性への認識、商品および発注先の調査やコストパフォーマンス、時間のプランニングなどを体験することは、学生にとって大きな学びとなった。ワークショップの準備、時間配分や人員の段取り、準備するもの、必要な材料などを確認した。

図 2 イカフェス開催の告知ポスターA２サイズ

デーリー東北
2019年（令和元年）8月1日（木曜日）（14）

10、11日「八戸イカの日」フェス

イカ手袋、ミニのぼり大漁旗作り…

多彩な催し 八工大生提案

八戸工業大（長谷川明学長）は10日、「八戸イカの日」フェスティバルin浜市場みなとっと」（8月10、11日）で行うイベント企画案の発表会を、同大メディアセンターホールで開いた。感性デザイン学部創生デザイン学科の学生6組が、親子で楽しむ塗り絵や「イカ手袋」作りといった多彩な催し物を提案した。（千藤文二）

八戸みなと漁協が運営している直売施設の名称公募で、同学科のネーミング案が採用されたことが縁となり、両者のコラボレーションが実現。学生側は事前に「みなとっと」を見学した上で内容を検討、若者ならではの発想を生かしたアイデアを示した。

企画案は塗り絵とイカ手袋作りのほか、女子受けを狙った「海鮮カップケーキ」作り、子ども向けの「八戸ジュニアお魚検定」、希望者を撮影しイカのイラストをあしらったポストカードに収める「イカ様プリント」、大漁旗をモチーフにした「ミニのぼり大漁旗」制作の4件。関係者は今後、細部を詰め、当日に備える。

イカ手袋作りを提案した尾崎真央さん（21）＝4年＝は「魚食普及を研究しており、イカ手袋のライトアップなどを通じ、若い人たちに『イカの町・八戸』を発信したい」と意気込みを語った。

イベントの開催時間は10、11日とも午前10時～午後3時。入場無料。

「ミニのぼり大漁旗」のサンプルを撮影する学生（左）。右側は高屋喜久子教授

図 3 デーリー東北新聞掲載記事

3.9 大学での企画発表会　7 月 29 日

みなと漁協から岡沼組合長はじめ、五戸理事、河村理事、大越室長 4 名の参加を賜り、本学メディアセンターにおいて、企画発表会「八戸工業大学×浜市場みなとっと」を開催した。大学からは長谷川学長、橋本副学長、高橋学科長、皆川先生、高屋、後藤らが参加、7 チームの学生 22 名が、イベント案について発表し、質疑応答を受けた。（**図 3** 新聞掲載記事参照）

3.10 イカ手袋ライトアップ点灯式　8 月 8 日

イカ手袋のライトアップ点灯式が開催された。みなと漁協関係者 6 名、尾崎君を中心とした 4 年生の学生 4 名、高屋と後藤が参加。17 時の明るい時間から準備、設営を始めて 18 時頃には夕暮れの中にイカ手袋が浮かび上がって来た。みなとっと建物正面の軒下 9 メートルに渡って、約 19 メートル長さのロープにイカ手袋が 38 個吊り下げられ、大きく緩やかなアーチを描いたライトアップは遠くからも目を引いて魅力的であった。使用した LID 電球の総数は 200 個。みなとっとの建物壁面は黒に近い色彩のため、イカのライトアップがより一層効果的に輝いた。8 日から 15 日まで合計 8 日間にわたり、17 時から 22 時まで、みなと地区のライトアップを飾り、新聞にも掲載された。（**表 3** 次ページ右上新聞掲載記事参照）

表 3 イベント７種類の概要

第１回八戸イカの日フェスティバル　７種類のプログラム概要

	プログラム名 副題概要	開催日時 令和元年８月 開催場所 担当学生　学年	内容・写真
1	**イカ手袋ライトアップ** イカ手袋を軒下に吊るしてライトアップ	８日～15 日 (8 日間の夜間) 尾崎 真央　４年 沼岡 勇成　４年 佐藤 勇太　４年 長谷川 和輝 ４年	 ４名の学生とみなと漁協のメンバー　８日ライトアップ開始 デーリー東北新聞掲載 2019 年８月９日
2	**ミニのぼり旗** 大漁旗風のミニ旗とミニのぼり旗	９日搬入 10 日～ 産直コーナー 蛯名 大輔　３年 只野 成一　３年 大向 修平　３年	 大漁ミニのぼり旗　縦型　企画説明ボード　天井に吊したミニ大漁旗
3	**海鮮カップケーキ** インスタ映えフード	10 日・11 日 11 時～15 時 漁師食堂鮮八 中村 美緒　３年 藤村 安里紗 ３年	 企画説明ボード　海鮮カップケーキ使用具材　海鮮カップケーキの試作品と名前
4	**子供が楽しいみなとっと** 子供向けの塗り絵	11 日 10 時～11 時 水産研修室 杉山　舞　３年 佐藤 美紀　３年	 企画説明ボード　参加した親子３世代　塗り絵
5	**八戸ジュニアおさかな検定** 子供向けのお魚クイズと認定証	11 日 11 時～12 時 水産研修室 山本 将太　３年 宮内　凛　３年	 参加した親子連れ　おさかなに関するクイズ　おさかな検定認定証
6	**イカ手袋ワークショップ** 手袋に絵を描くワークショップ	10 日 13 時半～15 時 水産研修室 尾崎 真央　４年 斗沢　愁　４年 長谷川 和輝 ４年 鈴木 宏宗　４年	 イカ手袋を干物製作機に吊して回転 子供達にも大人気 説明をする尾崎君（中央）　ワークショップの様子
7	**イカ様プリント** 写真撮影後に合成プリント	10 日・11 日 11 時～15 時 実習室 稲葉 航生　３年 髙橋 祐賢　３年 伊崎 貴己　３年	 簡易型スタジオで撮影　イカと遊ぶ合成写真のサンプル　撮影時間を記載した整理券

3.11 みなとっと搬入　8 月 9 日

ビジュアルチェンジのチームにより制作された大漁旗のミニサイズ版を天井に取り付けた。みなとっと側の販売担当者から、「可愛い」との声が上がっており、イカフェス終了後も撤収せずに展示を続けて欲しいとの要望があった。賑わいが足りない、地味といったみなととっとの問題解決の一つの手法となったと考える。産直コーナー入口付近の天井には、30 個のミニ大漁旗が飾られた。サイズをひとまわり大きめにして、産直コーナー奥の天井にも装飾する、年末年始や春の 1 周年など季節とイベントによって変化をつけるなどの応用展開が考えられる。

4. みなとっとイカフェス開催

8 月 10 日・11 日の両日ともに、学生 22 名と教員 2 名が、スタッフとして 7 種類のプログラム開催を担った。（前ページ**表 3** 参照）

イカ様プリントは合計 41 組が体験、親子連れや、親子三世代、ご夫婦など、家族連れに人気であった。がほとんどであった。インスタ映えフードとして提案した一口サイズの海鮮カップケーキ総選挙には、141 票の投票があった。1 位に選出されたのはサーモンの色が映える「乙姫のおもてなし（サーモン・ホタテ・マグロ使用）」で 31 票、2 位が「紅玉の真珠（イクラ・ヒラメ・シソ使用）」で 28 票、3 位が「爽やかな潮風（サバ・ミツバ・レモン使用）」で 24 票となった。今後は食堂関係者らと相談の上、試作品開発につなげていく予定である。

写真 2 塗り絵とジュニアおさかな検定の記念写真
13 名の参加した子供達と、左端杉山さん、右端佐藤さん

子供が楽しいみなとっとの塗り絵と、八戸ジュニアおさかな検定のプログラムには、保護者らと共に 13 組の参加があり、幼稚園から小学校低学年の子供達が楽しそうにワークショップを体験した。出来上がった塗り絵は水産研修室の壁に貼り、グランプリ賞・げんきで賞・カラフル賞など各賞の表彰短冊をつけて表彰。おさかな検定のクイズ回答者には、成績優秀者に金・銀・銅メダルを子供たちの首にかけて表彰した。記念写真（**写真 2**）では、保護者の両親や祖父母らが嬉しそうにカメラを向け、親子三世代が参加する絶好の機会となったことを確信した。みなと漁協からも好評を得た。

イカフェス初日は、一時豪雨が降るなどあいにくの天候ではあったが、1398 名が来場した。二日目は日曜日でもあり、みなとっとのオープニング日に迫る 2070 名の来場者となった。通常のウィークデイは約 500 名程度、土日で約 1000 名程度の来場者数となっている現状の中、2 日間の合計で約 3500 名近い入場者を得たことは、大きな実績になったと言えよう。

今回の教育プログラムが、イカフェス成功に寄与したと想定するならば、次の 2 点が大きな要因であると考える。1 点目は、プログラムの準備段階でチームごとに PDCA を 3～4 回繰り返し、教育プログラムとして効果的な活用がなされたこと。2 点目はイベント主催者のキーマンである、みなと漁協の大越室長との相談会が 4 回に渡って開催され、学生のモチベーションが向上したことである。また、学生の考案が実施されるか否か、実施場所やその準備物について、相談会のその場で、現場を取り仕切るキーマンから即答をもらえることは、緊張感と共に大きな励みになったと言える。

5. 教育プログラムの応用展開

本研究では、魚食文化普及のイベント開催を事例として取り上げた。みなとっとではイカフェス以外にも、さまざまな研究テーマが考えら

れる。大漁旗の文様の起源や物語を調査し、それらを応用した商品や、パッケージなどの開発提案。さらには漁師食堂のメニューに関するグラフィカルな表記や、インバウンド対応の英語ほか多言語の表現、分かり易い写真やイラストの掲載など、ビジュアルデザインの側面からの改善・改良が想定される。イカ様プリントの実施では、写真合成によるプリントを持ち帰る企画であったが、参加者の合意を得て写真や映像をインスタグラムやユーチューブにアップするなど、SNS を活用した情報発信の応用展開が考えられる。ウェブサイトへの掲載や、QR コードを活用した提案にも可能性が広がる。

イカフェス開催の告知ポスター（**図 2**）に採用されたイカのイラストを大胆に配置した、ピンクとブルーのＴシャツは大人気で「ぜひ買いたい」という声が上がっていた。イカのキャラクターを活かしたストラップ、クリアホルダー、ポストイットなど小型の文具類、タオルやＴシャツなどの衣料品類、その他生活小物などの商品開発、パッケージデザインや販売促進物への応用展開が考えられる。

イカフェス開催へ向けての準備から実施まで一連の作業を通して、学生のデザイン力が向上したことは言うまでもない。それに加えて、アイディアの発想力、外部講師との相談会に向けての資料準備や情報の表現力、打合せの企画書づくり、交渉力が身に付いたと言えよう。8 月 11 日イカフェス終了後の現場反省会で、いつもは発言しない学生が自ら率先して挙手、活き活きとした表情で感想を述べていたことが印象に残る。その学生が自信を得た結果、意欲的に作品制作や課題に取り組んでいることは、嬉しい限りである。

今回、アクティブラーニングを主体とした授業が自主性を育んでいくことに加え、責任感や人間力の醸成に大きく役立つことが明らかとなった。成功体験が、学生自身のモチベーションアップにつながり、次の展開へと進んでいくことは間違いないであろう。イカフェス開催当日は夏休み期間中であり、後日、改めての振り返りと反省の機会を設定するのが難しく、そのまま後期を迎える結果となってしまったことは、大きな反省点である。

10 月 15 日にみなとっとで開催された、第 1 回イカフェスの意見交換会において、令和 2 年の「第 2 回八戸イカの日フェスティバル」開催が決定し、八戸いか釣漁業協議会魚食普及委員会より、本学創生デザイン学科の学生に協力依頼を受けた。第 1 回の実践から成果を踏まえ、次年度のさらなる展開へと結んでいきたい。

大越室長からは、「大変短い準備期間にもかかわらず学生の皆さんには、ポスター制作、イベントの企画運営にいたるまで大変だったろうと思いますが、積極的に取り組んでいただいたことに対し、深く敬意を表します。また、この度のイカフェスが学生の皆さんのスキルを磨く良い機会となり、ますますご成長されることを期待いたします。」と感謝と労いの言葉を頂戴した。

本研究では、魚食文化普及の貢献に向けた教育プログラムを研究したが、他の領域においても応用展開の可能性が充分にあると考えられる。例えば、2020 年に発掘から百周年を迎える是川縄文遺跡。2021 年には北海道・北東北縄文遺跡群の文化遺産として世界遺産登録を目指しており、研究テーマとして取り上げていきたい。

視点を転ずれば、青森県で盛んな農業とそれらの加工食品や、鉱工業、観光へ向けた地域連携型の教育プログラムが考えられる。また、八戸市内まちなかの賑わい創出など、地域貢献を視野に入れた教育プログラムの実現を通して、地域に貢献できる人材育成を目指し、研究を深めていく。

若年層の「魚離れ」が進行する時代背景の中で、大学生の呼びかけやワークショップの実施などにより、小中学生や幼稚園児らが魚食文化に関して興味を抱き、地元の魚に対する郷土愛を育んでいくことを期待する。みなとっとが、漁業と生活者を結び、八戸圏域の魚食文化のターミナル的役割を担うことを目的として、本学科も引き続き協力していきたい。漁業と魚食文化を

背景に、子供と親と祖父母の 3 世代型情報発信基地の役割を担うべく、「みなとっと×八戸工業大学」の研究を深めていく。

謝　辞

海業支援施設ネーミング募集の情報提供など、八戸みなと漁業協同組合との連携のきっかけを作っていただいた八戸市議会議員の豊田美好氏に感謝を申し上げる。また、本研究を全面的に支援していただいた八戸みなと漁業協同組合の岡沼組合長はじめ理事の方々、大越政弘企画室長には格別の感謝を申し上げたい。イカフェス開催に向けてお世話になった、八戸いか釣漁業協議会魚食普及委員会の方々、および本学社会連携学術推進室と、金子室長、泉主事にも感謝を述べる。イカ手袋開発には、本学電気電子工学科の佐々木先生、花田先生のご指導を賜り感謝を申し上げたい。イベントの発想から企画を練り上げ、イカフェス開催スタッフとして頑張ってくれた本学創生デザイン学科 3年生・4年生の22名（**表2**に氏名記載）に感謝する。イカ手袋のライトアップを考案実践し、イカフェスポスター制作に東奔西走した尾崎真央君の健闘を讃え、感謝を申し上げる。イカフェスポスターのために、イカのイラストを制作してくれた4年生古戸杏実さん、創生デザイン学科の高橋学科長はじめ岩見先生、開催当日もご指導頂いた皆川先生にも、記して感謝を申し上げる。

参考文献

1) 松永安光、徳田光弘：世界の地方創生–辺境のスタートアップたち, 学芸出版社, 2017.
2) 和辻哲郎：風土, 岩波書店, 1991.
3) エドワード・ホール：かくれた次元, みすず書房, 1970.
4) 荷方邦夫：心を動かすデザインの秘訣, 実務教育出版, 2013.
5) 地域発ヒット商品のデザイン, パイインターナショナル, 2014.
6) 農林水産省：伝えよう魚食文化、見つめ直そう豊かな海 http://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h19/pdf/data1-1.pdf（2019 年 11 月 23 日アクセス）
7) マルハニチロ株式会社：魚食文化に関する調査 https://www.maruhanichiro.co.jp/corporate/news_center/research/pdf/20140424_gyosyoku_bunka_cyousa.pdf（2019 年 11 月 23 日アクセス）
8) 浜市場みなとっと https://minatotto.com/ （2019 年 11 月 23 日アクセス）

要　旨

八戸はイカの漁獲高日本一を誇る地域であるが、近年の全国的な魚離れを背景として、魚食文化の普及が課題とされている。令和元年 4 月に海業支援施設「浜市場みなとっと」が館鼻岸壁近くに新設され、8 月に「第 1 回八戸イカの日フェスティバル in みなとっと」が開催されることになった。本学創生デザイン学科の学生が、賑わい創出や親子三世代で楽しめるイベント案を構想、主催者側と打ち合わせを重ね準備を進めた。開催期間 2 日間に 22 名の学生が 7 つのプログラムにスタッフとして参加し企画運営を担った。本研究では、その経過報告を纏めると同時に、地域貢献型教育プログラムとしての今後の応用展開と発展性を探究する。

キーワード： 八戸，魚食文化，みなとっと，教育プログラム，地域貢献